

## 第六編 ビクトリア湖岸から内陸へ

オーウェンとルイスリーキー夫妻そしてその子リチャードの考古学的足跡をたどって

キスムの、ある賑やかな交差点にウォルター オーウェン (Archdeacon Walter Edwin Owen) の石碑が立っているという。曰く“彼は生涯を全人類の為の正義の闘いと病と貧困の人々の介護に奉げた”(He devoted his life fearlessly to the fight for justice for all and to the care of the sick and needy) と。

古くからニャンザ州に住む者は、1920年代から1940年代にかけての宗教活動や政治活動を通じてオーウェンを記憶しているだろうが、少なからぬ人々はオーウェンの考古学、地質学、古生物学の分野での大きな貢献を思い出すに違いない。オーウェンは英国国教会の大執事であり、カピロンド地区で1918年から活動を開始し、1945年にリムルで死ぬ直前までその地区にいた。彼は1878年にバーミンガムに生まれ、1904年にモンバサに普及活動にやって来た。ウガンダとタンザニアでの初期の活動では、アフリカ語に堪能な才能を表し、且つアフリカ人の習慣に異常な関心を示したという。オーウェンのキリスト教会のアフリカ人信徒は、彼が聖書や賛美歌をルオー語や他のアフリカ語にうまく翻訳し、駆使するのによく慣れ親しんだという。また彼は1919年の疫病蔓延の時に、11000人の人々に血清を予防接種したと記録されている。1930年までに、彼は、カピロンドの納税者協会の創設者としての地位を確立した。その遣り方は、イーストアフリカスタンダード紙に記事を載せ、課税 (the Hut Tax や the forced labor) についての争いで我々はアフリカ人の相談に乗ってやる必要があると訴えたりすることだった。植民者コミュニティーや宗教活動の同僚たちは、彼の社会的、経済的、政治的考えに賛成できない場合にも、彼の迫力と、個人的な魅力と、気配りと、不屈の熱気に負けてしまうことが多かったようだ。また彼は、27年間のカピロンドでの活動の間に、70以上の考古学的且つ古生物学的遺跡を発見している。南西ニャンザのカンジェラから彼が発見した象の足の骨は、ルイスリーキー (Louis Seymour Bazett Leakey 1903-1972) の第三回ケンブリッジ探検隊 (1932年) を西部ケニアの探検へ振り向けるのに大いに役立った。この探検隊は、中新世 (Miocene) と更新世 (Pleistocene) 初期の化石層と思われた部分に調査を集中した。ルイスリーキーは、まず、カンジェラで貝塚を試掘しており、カナンで完新世 (Holocene) と思われる数体の人骨を発掘している。引き続いて、マリーリーキー (Dr. Mary D. Leakey) が、1948年に、ルシंगा島のサイトから、著名な “Proconsul africanus” の頭骨 (ケニアの中新世の化石類人猿の頭骨) を発見している。

オーウェンは、子供の頃アイルランド北部で暮らしており、石に興味をもつ子供であったようだ。長じてケニアで布教活動をするようになり、道なき道を歩き回り多くの考古学的且つ古生物学的足跡を発見し、休みにはその発見場所で掘削調査をして過ごした。発見さ

れたものは当時のナイロビのコリンドン記念博物館に送られるか、海外の博物館に売られた。特に大英博物館に売られ調査の資金に当てられた。こうして集められたオーウェンの標本類は現在では大英博物館の中期中新世の哺乳動物の化石コレクションの中心をなしている。標本の売却は、残念ながらケニアからの分散という結果を齎したが、オーウェンにとって、彼の遺跡の追求の為に資金作りは必要だった。彼は熱心な収集家であり、化石探しに熱狂し且つ所有することを楽しんだ。彼の家ベランダに12フィートの架台を作り標本を陳列していた。しかし、1939年の立法で、化石標本物は植民地政府のものとなった。この結果オーウェンは、収集の喜びを奪われた上に、これから資金繰りをどうすればいいのかと嘆いている。オーウェンの化石や遺跡を求める熱狂は、時に技術不足から破壊につながった。採掘技術は今日よりも遥かに稚拙であった。しかもオーウェンはきちんとした訓練を受けていなかったため、彼のやり方は植民地法に抵触すれすれであり、大英博物館からも注意を受けていた。しかし、彼は壊れやすい標本をもてあそぶことをやめようとしなかった。彼は夜、ランプの火でハンマーとドライバーを使って石灰岩層をはがし、歯を発見したと報告しているが、その中に頭蓋骨の保存は全く見込みが無いとも記しており、心ある科学者の臍をかませている。1930年代には彼の興味は古生物学よりも考古学に傾いている。ニャンザ州が考古学の宝庫であることがわかったからだ。彼は何十もの石器時代のサイトをケニア西部で発見し、その大部分から収集し、あるものは採掘している。彼は同時に当時の有名な考古学者と連絡を取っている。その中でもっとも頻繁に交流したのがルイスとマリーのリーキー夫妻であった。又彼が師と仰いだのはウェイランド(E.J.Wayland)であった。彼は当時ウガンダ保護領の地質調査のディレクターだった。オーウェンは自らを「鋭敏なアマチュア」と呼んでいたが、正式な学者としての知識を持っていなかった彼の他の学者たちに対して抱いていた気分を表している。彼は考古学的な論文を発表する前に、これらの学者たちに原稿を見せる習慣があった。ニャンザ州の南部、ホマ湾の南、カルンガ近郊、ンギラにある考古学サイトで人類の遺物を発見した報告で、オーウェンは雨季と乾季の地質学的見方でリーキーとウェイランドが見解を異にしたために論文発表をあきらめている。しかし彼は、その発見や収集活動の付帯情報をまとめて科学専門誌等に発表している。またリーキー夫妻と共同執筆をしている。「西ケニアの初期及び中期石器時代サイト」と「新石器時代の陶器についての討論」である。後者はオーウェンの死後、リーキー夫妻によって出版された。オーウェンの考古学への傾倒は、当然、彼の布教活動の同僚たちと摩擦を起こしたようだ。オーウェン自身は、宗教活動と現代人や前人類についての研究活動を同時に進めて楽しんでいるかのようにであった。彼の論文にはこの研究と宗教的な信念に精神的な葛藤は全く見られない。しかし彼が実際にアフリカ人の生徒に対して考古学の紹介的なテキストを著そうとしたとき、教団の上役との間でぶつかることになった。彼らはオーウェンに、アフリカ人の心にもたらす影響を考えて、聖書の創造主に戻るように示唆したようだ。リーキー夫妻も他で出版するように促したが、オーウェンは結局出版を取りやめてしまった。オーウェンは教団に対して、「もし我々が教会

に固執し、近代的な知識の息吹にすらかき乱されるようなひ弱なものであるならば、人々を教会からもっと解放するべきだと思う。」と怒りと失望をぶつけ、4004BC（英国国教会大司教が計算した創造の年）以前に東アフリカに人類が存在したという説を庇護する立場で教団の同僚たちと議論している。ルイス リーキーも、その記録(記憶)の中でオーウェンのリベラリズムを、「彼は、自由に考えることが出来る人間で、教会のあらゆるドグマ(教条)を受け入れなかった」と表現している。つまり彼は聖職者であり、自然主義者であった。彼を魅了して止まなかった「アフリカの過去」の化石と文明の研究は、世界に大きな貢献をし、彼の研究や論文は、彼の同僚であるリーキー夫妻に引き継がれていった。

ルイスとマリーの息子であるリチャードは、当時の古人類学の指導的立場にあった両親の影響と薫陶を受けて育ち、まるで考古学の世界に生まれた「申し子」の如くであった。リチャードは、人類の起源を探る上で重要な『ツルカナ ボーイ』と呼ばれるホモエレクトスのほぼ完全な骨を発見する。そして約20年間に亘って、ケニア国立博物館のディレクターを勤め、さらに野生動物保護局のディレクターとしても活躍した。その間多くの研究を発表している。つまり「Origin」(起源)、「the People of the Lake」(湖の生活者)、「the Sixth Extinction」(第六番目の死滅)や「the Making of Mankind」(人類の生い立ち)などである。このリーキー家のケニアにおける人類学や考古学上の貢献は大きい。しかし彼等の目を初めにケニアにひきつけたのはオーウェンの素人的な発見であった。オーウェンのイギリス国教会の大執事としての普及活動が、彼をしてニャンザ州の広範な地域を歩き回らせ、同時に多くの人類の足跡を発見させた。そしてケニアに研究の場を据えたリーキー夫妻の考古学的活動は、更に多くの貴重な発見を齎し、その息子リチャードのツルカナ湖東岸クービホーラ(Koobi Fora)の発見で、ケニアに世界中の注目が集まることになる。即ち人類発祥の歴史の解明という大ロマンである。

本稿ではビクトリア湖岸の生活者達の足跡(湖岸から内陸へ)を、せいぜい1万年ほど遡りながら研究したレポート(“Life by the Lake: ” by Peter Robertshaw)を頼りに、リチャードリーキーの研究に少しでも近付いてみたい。

ルイス リーキーが始めに試掘した時、カンジェラの貝塚には、石器はまれにしかなかったが、玉類が多く、且つ陶器は、それまで発見されたものとは異なっていた。彼は石器時代後期(the C branch of the Later Stone Age Wilton culture)に属するとした。更に彼は湖のワイナム湾(キスムの町の眼前に広がる湾)の東岸地区からは“Dimple-based”と称される鉄器時代陶器を包含するサイトを数箇所発見している。この陶器は現在“Ureware”(ウレウェ文化期の陶器=紀元前第1千年紀後半に始まるアフリカ中東部の鉄器時代初期の陶器)と命名されており、時期としてはニャンザの紀元3-4世紀頃のものらしい。陶器の発見場所は湖の中や、島などである。これはバンツー系の農民たちが、サブサハラアフリカ(サハラ砂漠以南のアフリカを指す)の東部に拡大していく初期の段階の遺跡と

みなされている。紀元前第1千年紀後半から紀元3-4世紀と言え、日本では弥生文化から大和朝廷の日本統一の時期であり、中国では戦国時代から秦の始皇帝を経て、漢、五胡十六国時代である。

さて、1980年から本格的な発掘が始まり、貝塚から掘り出した骨から、年代の推定が行われた。年代を推定することは至難の業であり、信頼性が薄い、大まかに推定すると4-8,000年前の貝塚ということになるらしい。ホマ山の麓のカナム、カンジェラの複数の貝塚から、手作りで特徴のある装飾を施した陶器が出土しているが、これは現在オルトメ (Oltome tradition) 式陶器といわれるものである。この陶器は、ビクトリア湖周囲、セレンゲタイの岩穴、タンザニア北部のエヤシ湖からも発見されている。また類似の陶器は、スーダン南部からも出土している。貝塚からは、貝殻のみならず、石の道具（削器やナイフ形石器で多分矢尻や矢の先に使われた）が発見されている。その材料はその場で手に入るものもあれば、キシイの高地から取り出された石、そして稀にナクルやナイバシャ地区で取れる黒曜石が発見されている。矢尻のつかない骨は魚を取る道具の一つだったろう。民族誌学的には現在の漁業にヒントがある。現在に至るも漁業の方法や罟のかけ方には籠細工品が多く使われている。漁師たちの毎日の営みに、数千年を超えて尚何らかの古代の漁業を髣髴とさせる。またキシイで見たソープストーンの彫刻や細工物には、現地で可能だった加工しやすい石材があったことを裏付けている。

貝塚は、多弁である。当時の人々の蛋白源が湖やその周辺の幸であったことを偲ばせる。貝類は腹足類や二枚貝、偶には大きなナイルオイスターが含まれているが、大部分は沿岸の浅瀬で容易に採取できる貝類であった。特に肺魚 (Lungfish) を好み、残りはナマズやパーチのような魚であった。そして湖岸に生息する河馬、水牛、アンテロープであった。更に象、イボイノシシ、カワイノシシ、鱔の骨も偶には発見されている。完新世〔統〕初期のビクトリア湖岸生活者達は多岐にわたる狩の生活をしていたことになる。貝塚からは、野生以外の動物の骨や農業の生産物を窺わせるものは発見されていない。陶器類には、東アフリカで最初の陶器と推定されるものが含まれている。現在のケニア人の生活環境を代表する穀類（キビ、モロコシ）や家畜（牛、羊、ヤギ）の足跡が現れるあたりから、湖岸の生活者の生活パターンは変化していったと思われる。ビクトリア湖から約22キロメートル内陸に入ったクジャ川にあるゴゴの滝 (Gogo Falls) のあたりにオルトメ人が湖岸を離れて生活し始めた足跡がある。

1983年に、Gogo Falls の調査が実施され、オルトメ式の陶器が他の石器とともに発見され、水晶や、黒曜石、貝殻、骨が発見された。残念ながら一部は近くの Gogo 水力発電所建設工事で破壊されてしまった。推定すると内陸のオルトメ人達の食事は、湖岸の食事と酷似しているが、当然ながら貝、魚が少なくなっているが、一方各種の動物、特に野牛

が多くなっている。また貝塚からは、家畜の骨とともに、オルトメ式と異なる陶器が発見されている。この新式陶器はエルメンテイタン (Elmenteitan tradition) 式に属する。これはむしろ中央リフトバレイの淵のマウ断層崖 (Mau Escarpment) からの出土で知られている。紀元前第1千年紀にあたる。このオルトメ式とエルメンテイタン式の違いは、後者が恐らく北と東からの移住者達が初めて家畜と穀物を持ってビクトリア湖盆地 (Lake Victoria Basin) に現れ、狩を生活としていたオルトメの人々を吸収またはそれに乗り変わってしまったものと考えられる。オルトメ人は狩で取った動物の肉や皮を移住者に出し、代わりにミルクや穀物をもらおうといった交流が想像される。そして Gogo Falls の貝塚や堆積物の中には、エルメンテイタン式陶器のほかにウレウエ式に良く似た陶器が表土近くから発掘されている。これは紀元2-3世紀にあたる鉄器時代の最初の段階のもので、恐らくはバンツ族の農民たちに原因を求めるとされる。特に Gogo Falls では、アフリカの東半分はこの時代のサイトからは稀な、鉄製の貴重なコレクションが発見されている。しかし鉄の遺品はあるが、Gogo Falls で鉄の溶解を証拠立てるものが発見されていない。他に、2個の研磨された石斧と海の貝で作られた装飾品などがあった。これらは鉄器時代初期またはエルメンテイタン後期の物と推定される。

Gogo Falls は、狩の生活者オルトメ人、家畜と穀物を持ったエルメンテイタン人、そして鉄器を使う種族が、この地域を支配するまでを物語っている。更にこの鉄器時代初期の遺跡からルオー族が移動してくるまでの長い時間を埋めるものはないが、その手がかりが、この Gogo Falls から北西に、たった2マイルの位置にある「Thimlich Ohinga の遺跡」である。この地域には沢山の石で作った構造物で周囲を囲んだ同じタイプの遺跡が存在しているが、Thimlich は最大のものであるという。うわさではもう少し大きなものがあったが、Gogo Falls のダム工事で破壊されたともいう。Gogo Falls の遺跡と Thimlich Ohinga の遺跡は互いに2マイルしか離れていないとはいえ、その時代も、その主役も異なっているようだ。鉄器を持ったバンツ族の後にナイル系ルオー族が、ビクトリア湖岸に現れるまでに、千年を超える歴史が存在しているようだ。そしてバンツ族の流れを汲む種族とナイル系の流れを汲む種族の融合と攻防の歴史も大変古いものがあるのだろうと推測される。人類の進化の歴史に興味を持たない人はおそらくいないだろう。ルーツを知っておくことは人類の未来を計る上で役立つからだ。ケニアが人類の発祥の地の一つであったとすれば、人類の発祥の秘密をとく鍵があるのではと期待される。そしてそのことがケニアに、そしてナイロビに生活し学ぶ事の魅力の一つになるはずだからだ。

#### 参考文献

- ①Kenya Past and Present Issue 19 ('Life by the Lake' by Peter Robertshaw 26-33)  
& Issue16 ('Archaeology and the Archdemon' by Sally McBrearty)
- ②The Origin of Humankind (by Richard Leakey)

考古学上の年代紀

Era 代	Period 紀	Time(Million Of years) 100 万年単位	Epoch 世	Cultural Stage 文化時代	Cultural Period 文化期	
Cecozoic 新生代	Quaternary 第四紀系	(1 万年前) 0.01	<b>Holocene</b> 完新世 [統]	Neolithic 新石器時代	Azilian 西欧中石器時代のアジール文化期	
		0.04	(Upper)	(Upper)	Magdalenian マドレーヌ文化期 Solutrean ソリュートレ文化期 Gravettian グラベット文化期 Aurignacian オーリニャック文化期 Chatelperronian [全て欧州後期旧石器時代の遺跡名]	
					(Middle)	Mousterian ムステイエ文化期 [欧州中期旧石器時代の遺跡]
		0.15	<b>Pleistocene</b> 更新世 [統]	Paleolithic 旧石器時代	Levalloisian ルバロワ文化期 [欧州の旧石器時代中期から後期にかけての剥片石器系文化]	
		0.5	(Middle)		Clactonian クラクトン文化期 [イングランドの下部旧石器時代の遺跡]	
			(Lower)	Acheulian アシュール文化期 [欧州で手斧を特徴的な石器とする前期旧石器文化の遺跡]		
	Tertiary 第三紀系	(200 万年前) 2	5	<b>Pliocene</b> 鮮新世 [統]		Oldowan タンザニアの世界最古の石器文化
			5	<b>Miocene</b> 中新世 [統]	Hominoids,, 原人 origin of hominids	
			2 5	<b>Oligocene</b> 漸新世 [統]	Anthropoids, 類人猿 Origin of hominoids	
			3 5	<b>Eocene</b> 始新世 [統]	Origin of anthropoids 類人猿の起源	
			5 3	<b>Paleocene</b> 暁新世 [統]	Prosimians 原猿類	
			6 5			

(リチャードリーキーの “The Origin of Humankind” より抜粋)